

カントの徳論はロボットの道徳的地位を擁護できるか

清水 颯 (Hayate Shimizu)

北海道大学

近年、AI 技術の発展はめまぐるしく、それに伴い、ロボットと人間が共生する社会が現実味を帯びてきている。そこで、人間と交流するロボットに何らかの道徳的地位を与えるべきか否かが、AI・ロボット倫理の文脈で活発に議論されている。例えば、Bryson(2010)は、"Robots should be slaves"という論文で、ロボットは人間にとって道具的存在であるべきであり、道徳的地位を与えてはならないと主張する。Turkle(2011)も、ロボットと人間の関係は偽物であり、ロボットは道徳的配慮に値する地位をもつべきではないと警鐘を鳴らす。このように、あくまでロボットは、人間のような感覚や意識をもたない機械であり、人間にとって道具的存在であるべきだという見解は根強い。

しかし一方で、ロボットが意識のような内在的な属性をもたないとしても、それはロボットが道徳的配慮の対象にならない根拠ではないと考える立場が登場している。これは、「プロパティ・アプローチ(property approach)」に対して、「関係論的アプローチ(relational approach)」と呼ばれる立場である。この潮流の嚆矢となった Coeckelbergh は、ある存在の内在的な属性ではなく、それらが関係性の中で人間にとっていかに現れるかに着目し、関係論的転回(relational turn)を主導した。Coeckelbergh によれば、ロボットが心的状態をもたないとしても、我々はかれらと交流し、他者であるかのような関係を結ぶことができる。そして、その関係こそが、ロボットに道徳的配慮の受け手(patient)としての地位を与えるために重要だと考えた。Coeckelbergh は多くの論文でロボットの道徳的地位を擁護しており、その後 Gunkel や Danaher などが、ロボットの権利やロボットとの友情などの問題へとそのアイデアを展開している。

さらに、ロボットの属性ではなく、人間とロボットの関係を出発点とする関係論的アプローチは、ロボットとの具体的な関係やインタラクションが人間の性格へ与える影響に注目する。それゆえ、人間からみたロボットとの関係を基礎とする関係論的アプローチは、徳倫理的な観点へと接合される。例えば、Gerdes や Cappuccio らは、ロボットとの関係を通じて人間の性格や徳／悪徳が陶冶される可能性があるとして指摘することで、ロボットに道徳的地位を与えることを提案する。このアイデアは、関係論的アプローチに触発されたものであり、Coeckelbergh(2021a)も、関係論的アプローチに基づいたロボットの間接的な道徳的地位は、徳倫理の観点から正当化されることを示唆している。そしてこのアイデアは、意外かもしれないが、カントの徳論に影響を受けて展開したものである。

本発表では、以上のバックグラウンドを踏まえて、カントの徳論はロボットの道徳的地位を関係論的な観点から擁護するために有効であるかを評価する。この議論でしばしば引用されるカントの徳論での議論は、我々は自分の道徳感情を弱めて徳のある性格を損なわせないために、動物に苦痛を与えないよう道徳的な配慮をしなければならないと

いうものだ。このように、あくまで自分に対する義務として、動物への配慮を要求するのがカントの着想である。Coeckelberghらは、このアイデアをロボットにまで拡張して、ロボットに間接的な道徳的立場を与えることができると考える。これをCoeckelbergh(2021b)は Kantian dog と呼んで、議論の出発点とする。

しかし、カントの徳論は、関係論的アプローチをベースにした徳倫理からロボットの道徳的地位を擁護するための出発点になるだろうか。実際にカントの議論を見てみると、カントは、動物だけでなく植物や自然界の美しいものも残虐に扱わないことを間接義務として規定している(VI: 443)。なぜなら、自然物を破壊してはならないのは、そのような性癖は人間の道徳感情を弱めてしまうからであり、動物を虐待してはならないのは、人間との関係において役に立つ共感能力が弱まるからである。このとき、自然物や動物が、人間とどのような関係を結んでいるのかは関係ないはずである。あくまで、人間にとって役立つという道具的で手段的な観点においてのみ、自然物や動物も大切に扱うべきだと説かれている。つまり、厳密な意味でカント的な徳論の観点に立てば、それがどのような外観をもって人間に関わろうとも、それが人間の有徳な性格形成に貢献することがなければ、配慮されるべき何らかの道徳的地位をもっていると考える必要はない。ここから本発表は、関係論的なアイデアに基づいて、人間の徳の陶冶あるいは悪徳の抑制に貢献するという観点からロボットに道徳的地位を与える議論はカントに触発されたものであるが、カントの徳論をその出発点に据えることは難しいと主張する。

【主要参考文献】

- カントの著作や書簡や遺稿や講義録の引用・参照の際は、引用・参照箇所のアカデミー版全集の巻数（ローマ数字）と頁数（アラビア数字）を、本文中に示す。
- Bryson, J. J. (2010) "Robots should be Slaves," In Yorick Wilks (ed.), *Close Engagements with Artificial Companions: Key Social, Psychological, Ethical and Design Issues*, 63-74.
- Cappuccio, M. L., Peeters, A. & McDonald, W. (2020) "Sympathy for Dolores: Moral Consideration for Robots Based on Virtue and Recognition," *Philosophy & Technology*, 33, 9-31.
- Coeckelbergh, M. (2010) "Moral Appearances: Emotions, Robots, and Human Morality," *Ethics and Information Technology*, 12, 235-241.
- Coeckelbergh, M. (2021a) "How to Use Virtue Ethics for Thinking About the Moral Standing of Social Robots: A Relational Interpretation in Terms of Practices, Habits, and Performance," *International Journal of Social Robotics*, 13, 31-40.
- Coeckelbergh, M. (2021b) "Should We Treat Teddy Bear 2.0 as a Kantian Dog? Four Arguments for the Indirect Moral Standing of Personal Social Robots, with Implications for Thinking About Animals and Humans," *Minds & Machines* 31, 337-360.
- Gerdes, A. (2016) "The Issue of Moral Consideration in Robot Ethics," *Acm Sigcas Computers and Society*, 45 (3) , 274-279.